「敬度」「敬度値」「敬度指数」

――敬意の度合の客観的な把握のために――

川上徳明

はじめに

命令・勧誘表現研究において、待遇表現特に敬語の問題と関連させつつそれを考察することが重要なことは言うまでもないであろう。命令・勧誘表現に際しては、同一の事実を要求するに当たっても場面に応じて、例えば

例一　行　け――おはせ――おはしませ――参　れ

例二　言　へ――のたまへ――のたまはせよ――申　せ

のような種々の表現がなされる。待遇的な観点からは右に掲げたような語が直ちに思い浮かぶであろう。あるいはまた

例三　たばかれ――たばかり給へ――たばからせ給へ

例四　見えよ――見え奉れ――見え給へ――見え奉り給へ――見え奉らせ給へ

といった例も見られる。これらはそれぞれ待遇価値を異にしよう。命令・勧誘表現においては、話し手（命令者）と聞き手（受命者）との身分や力関係、心理状況如何等によって、種々の表現形式がとられるのである。[*1] 右には動詞・補助動詞の命令形によるごく簡単な例を掲げたが、事実としては更に複雑な表現形式が存在する。そうした複雑な表現形式、なかんづく待遇表現形式の、敬意の高低、敬意の度合を客観的に把握するために、「敬度」「敬度値」「敬度指数」という一連の概念を改めて提唱する。[*2] それに基づいて、中古の物語、日記、説話等の命令・勧誘表現における待遇表現関係の問題を数量的、客観的に分析、考察した実例を提示し、これらの概念の有効性、必要性を明らかにしたい。

なお、以下、話し手、聞き手という語を、それぞれ命令者としての話し手、受命者としての聞き手の意で用いる。

一

待遇表現特に敬語による登場人物に対する言語的な待遇の高低、敬意の度合を「敬度」と称する。これを、次の会話文と地の文との二つに分けて規定する。

第一種　会話文中の命令・勧誘表現における聞き手に対する言語的な待遇の高低……A・B・C・D・Nの五段階

第二種　地の文における登場人物に対する言語的な待遇の高低……ⓐ・ⓑ・ⓒの三段階

右のような段階を措定するのは、待遇表現にも敬意の高さの差による相対的なつり合い関係、体系があるはずだ

との仮定に基づく。

まず第一種の敬度A・B・C・D・Nに相当する語句を『源氏物語』の例を中心に掲げる。[*3]

A　これはいわゆる二重敬語及び最高敬語に相当する。

……せ給ふ・……させ給ふ・おはします・おぼしめす・きこしめす・御覧ず・たてまつる（着る・乗る）・給はす・のたまはす等

の諸語である。

なお、「帰らせおはしませ」の如く「……せ（尊敬）＋おはしませ（最高敬語）」の形のものが稀にみられるが、ここでは一往Aに入れた。

B　これはいわゆる「敬体」であって「……給ふ」及び他の尊敬語の段階に属するものである。

……給ふ・遊ばす・おはす・おぼす（おぼし……）・おもほす・御殿籠る・給ふ・遣はす・のたまふ・まゐる（食ふ・飲む）等

の諸語である。なお、助動詞「る」「らる」（尊敬）もここに含める。

C　これはいわゆる「常体」であり、最初に掲げた例で言えば「行け」「言へ」の類である。常体表現の語一般について説明する必要はないであろう。ここでは特に謙譲語及び尊敬語の一部の扱いについて述べる。

1　謙譲語は、敬意の受手が話し手自身でない場合は問題としない。換言すれば、受手が第三者の場合は、その表現（受手尊敬）は話し手と聞き手との関係には一往関わりないものとする。従って、モデルの例文によって示せば、

「（我に）申せ」
「（我に）奉れ」
等は後述Dの「尊大体」とするが、
「（彼に）申せ」　「（彼に）聞こえよ」
「（彼に）奉れ」　「（彼に）仕うまつれ」
「（彼処に）さぶらへ」　「（彼処に）参れ」
等は「常体」扱いとする。謙譲語による敬意は「彼」即ち第三者に向かうものと解されるからである。換言すれば、ここには話し手の尊大な意識はないと考えるからである。
これは補助動詞の場合も同様である。
「（彼を）思ひ奉れ」　「（彼に）問ひ奉れ」
「（彼を）見奉れ」　「（彼に）見え奉れ」
「（彼を）扱ひ聞こえよ」　「（彼に）語らひ聞こえよ」
なお、この考え方により、二方面に対する敬語と呼ばれる「謙譲語＋尊敬語」「謙譲語＋る（らる）」の次の形も単に先のBの「敬体」の中に入れる。
「（彼に）申し給へ」　「（彼に）聞こえ給へ」
「（彼に）申しなし給へ」　「（彼処に）参り給へ」
「（彼に）奉り給へ」　「（彼に）奉れ給へ」

「（彼に）さぶらひ給へ」　「（帝に）奏し給へ」
「（中宮に）啓し給へ」
「（彼に）着せ奉り給へ」　「（彼に）見え奉り給へ」
「（彼を）拝み奉り給へ」
「（彼に）教へ聞こえ給へ」　「（彼を）導き聞こえ給へ」
「（彼処に）参られよ」　「（彼処に）さぶらはれよ」
「（彼に）聞こえなされよ」

また「謙譲語＋二重敬語」の形の

「（彼に）申させ給へ」　「（彼に）奉らせ給へ」
「（彼に）聞こえさせ給へ」　「（帝に）奏せさせ給へ」
「（彼に）見え奉らせ給へ」

等も、聞き手に対する敬意（尊敬）が累加されただけであるから、同じく単に先のAの「二重敬語」の中に入れる。

2　尊敬語動詞「召す」や「遣す」等の一部の用法。

「（汝が、彼を）召せ」
「（汝が、彼を）遣せ」

右の例のような場面で、話し手、聞き手が主従関係等の上下関係にあり、「召せ」「遣せ」が聞き手に対

する敬意（尊敬）を表していない場合や、「遣す」の本来の尊敬の意識が薄れ、常体表現とみるべきもの等。[*4]

D　これは謙譲語による聞き手即ち第二人称卑下であり、「受手尊敬」の敬意が話し手自身に向かうものである。いわゆる「尊大体」。

「（我に）申せ」　「（我が言を）承れ」
「（我に）奉れ」　「（我に）参らせよ」
「（我に）仕うまつれ」　「（我が許に）まうで来」
「（我が許に）参れ」　「（我が許から）まかれ」
「（我が許に）さぶらへ」

の類である。

N　これは「謙譲語＋尊敬語」の形で、謙譲語による「受手尊敬」の敬意は話し手自身に向かい、尊敬語「給ふ」の敬意は聞き手に向かうものである。ここは実例をもって示す。

「……忍びては（内裏に）参り給ひなむや。若宮の、いとおぼつかなく、露けきなかに過ぐし給ふも、心ぐるしう思さるゝを、（母君は）とく参り給へ」（『源氏物語』桐壺。帝→桐壺更衣の母）

院に八月十五夜せられけるに、（院）「参り給へ」とありければ、参り給ふに、（『大和物語』七七段。宇多院→皇女桂のみこ）

宮（大宮）の御前より「（こなたに）参り給へ」とあれど、（夕霧は）寝たるやうにて、動きもし給はず。（『源氏物語』乙女。大宮→夕霧）

右に見るように、これらの話し手は至尊乃至それに準ずる方、あるいは女宮である。話し手の、自らの立場に対する自覚がかかる自敬的な表現を取らせたものと考えられる。ここには聞き手即ち第二人称卑下の意識及びそれと表裏をなす話し手の尊大な意識は薄いとみるべきであろう。ともあれ聞き手に対する待遇価値として相反する「謙譲語」と「尊敬語」とを連ねた形であり、その待遇価値はほゞニュートラルということになろう。

次に第二種の「地の文における登場人物に対する言語的な待遇の高低」について説明する。

これは話し手と聞き手それぞれの、地の文における待遇の高低の意である。敬度ⓐ・ⓑ・ⓒの段階決定の基準は次による。

1　話し手について

その命令の詞に連続する地の文の為手尊敬語の有無及びその程度

ⓐ　二重敬語・最高敬語のもの

「……」と聞こえさせ給ふ。

「……」とのたまはす。

ⓑ　敬体のもの

「……」との給ふ。　　「……」と聞こえ給ふ。

「……」と語らひ給ふ。　　「……」と聞こえさせ給ふ。

ⓒ　為手尊敬語の無いもの（常体または謙譲語）

「……」と言ふ。　　「……」と聞こゆ。

「敬度」「敬度値」「敬度指数」

「……」と申す。　　「……」といさめ奉る。

2　聞き手について

（1）その命令の詞に連続する地の文の受手尊敬語の有無及びその程度

ⓐ　受手尊敬語の程度の高いもの

「……」と聞こえさせ給ふ。

ⓑ　通常の受手尊敬語のもの

「……」と聞こゆ。　　「……」と聞こえ給ふ。

「……」と申す。　　「……」といさめ奉る。

ⓒ　受手尊敬語の無いもの

「……」と言ふ。　　「……」と仰せ給ふ。

「……」と責め給ふ。

（2）右（1）で決定出来ない―（1）に該当する叙述が無い―場合は、その場面での聞き手自身の行為についての為手尊敬語の有無及びその程度（先の「話し手について」に準ずる）

ただし、ある登場人物に対する地の文における待遇が常に一定しているわけではなく、同一場面―しかも同一人物が同じ相手に対している場面―でも、前後でそれが異なる場合がある。この場合、話し手については、その命令の詞の後に直接する地の文の待遇形式、聞き手については、その命令の詞に対応する行為（会話を含む）に関わる為手尊敬語の有無及びその程度により、どちらかに決定する。この結果、高低二種の待遇がなされている

人物はどちらかというと時に低くランクされる傾向がある。

二

次は「敬度値」について述べる。「敬度値」とは前述の第一種の敬度を数値化したものである。数値化することによって、敬意の度合の、相対的な高低の指標たらしめようとするのである。具体的には、敬度Aをプラス3、同Bをプラス1、同Cをマイナス1、同Dをマイナス3とする。敬度Nは既に考察したところにより、待遇価値はニュートラルとみて、ゼロとする。

敬度C（常体表現）の敬度値をマイナス1とするのは次の理由による。命令・勧誘表現における聞き手に対する常体表現、つまり尊敬語なしの表現—これは通常下位者に対してのものである—には常になにがしか話し手の自敬・尊大の心意が纏綿しているとみられ、待遇上ゼロとは解し得ないからである。

「猶、（女に）いひ寄れ。たづね知らでは、さうざうしかりなむ」（『源氏物語』夕顔。源氏ⓑ→惟光ⓒ）

「おちくぼの君と言へ」との給へば、人々もさ言ふ。（『落窪物語』巻一。中納言の北の方ⓑ→侍女ⓒ）

右のように命令・勧誘表現において常体表現（敬度C）がとられる場合、その話し手と聞き手の立場は対等ではなく、その間に主従関係等の明確な落差をもつのが普通である。また、『源氏物語』の例で言えば、命令・勧誘表現で敬度C待遇の聞き手は、その九〇％までが地の文での待遇ⓒ段階の者である。あるいは後掲「第1表」の『落窪物語』の男君とあこきの例などを見ても、常体表現の待遇価値を知ることが出来よう。敬度Cをマイナス1とする所以である。[*5]

三

次に、ある作品、ある類型、ある登場人物等における敬度値の平均を「敬度指数」と称する。ここで簡単な例をもとに敬度指数の算出の方法を説明しておく。

第1表　敬度指数の例

例	作品	話し手→聞き手	A	B	C	D	N	計	敬度指数
1	源氏物語	惟　光→源　氏	5	0	0	0	0	5	＋3．00
2	源氏物語	薫→辨　尼	0	11	0	0	0	11	＋1．00
3	落窪物語	男　君→あこき	0	0	13	0	0	13	－1．00
4	夜の寝覚	男君→中宮（妹）	3	1	0	0	0	4	＋2．50
5	落窪物語	女　君→御たち	0	3	3	0	0	6	0．00
6	夜の寝覚	女　→　男	13	10	1	0	0	24	＋2．00

注1）敬度値　A＝＋3　B＝＋1　C＝－1　D＝－3　N＝0

2）敬度指数は小数点第三位四捨五入。以下同じ。

第1表は敬度指数の例である。例1から例3までは、ある一段階の用例のみのものを掲げてある。例1で、惟光から源氏に対する五例はすべてAであるから、敬度値の和は一五、それを用例数五で除して、敬度指数はプラス三、〇〇となる。これは敬度指数の最高値である。例2の場合はすべてBであるから、同様にして敬度指数はプラス一、〇〇となり、例3はすべてCであるから、敬度指数はマイナス一、〇〇となる。例4と例5は、それぞれある二段階の用例のものを掲げてある。例4はAが三、Bが一であり、敬度値の和一〇を用例数四で除して、敬度指数プラス二、五〇を得る。例5ではB、Cが同数であって相殺されるから、敬度指数はゼロとなる。例6には三段階の用例のものを掲げてある。敬度値の和四八を用例数二四で除して敬度指数プラス二、〇〇となる。要するに敬度値の和を用例数で割ることによって敬度指数が算出される訳である。

以上、敬度指数の算出方法について述べた。命令・勧誘表現における

敬意の高低の差、敬意の度合の差を数量的、客観的に把握し、各用例間の微細な差をも識別するために「敬度指数」という指標を設定するのである。

四

前三項にわたって「敬度」「敬度値」「敬度指数」について説明してきた。次はそれに基づいて命令・勧誘表現における待遇関係の問題を分析、考察した実例をいくつか取り上げる。なお、用例採否の主な基準は次のとおりである。

（一）会話文中の命令・勧誘表現のうち、肯定的なものの、完結形式を対象とする。換言すれば、禁止表現及び言いさしの表現は除くということである。

（二）引用形式には直接話法・間接話法の二つがあるが、そのうち直接話法のものを採る。両者は区別し難いことが多いが、間接話法と解すべき積極的な理由のないものは採ることとする。

第2表は中古の物語、日記、説話等の各作品の敬度指数を示したものであり、敬度指数の高い順に配列してある。表について若干の説明を加える。

1　物語類は（歌物語を除き）比較的敬度指数の高いものが多い。初期の『竹取物語』を含め、十六作品中の上位半分に位置する。

2　表中敬度指数プラス一、〇〇以上は『夜の寝覚』のみで、突出している。これは登場人物がほとんど高貴な人々

第2表　各作品の敬度指数

作品	A	B	C	D	N	計	敬度指数	順位
夜の寝覚	50	58	35	0	0	143	+1.21	1
和泉式部日記	6	8	6	1	0	21	+0.81	2
源氏物語	121	343	153	18	3	638	+0.78	3
堤中納言物語	10	16	19	0	0	45	+0.60	4
讃岐典侍日記	27	7	40	2	0	76	+0.55	5
落窪物語	28	176	106	2	0	312	+0.47	6
竹取物語	3	27	8	5	0	43	+0.30	7
篁物語	0	5	4	0	0	9	+0.11	8
古本説話集	16	24	65	4	0	109	−0.05	9
大和物語	0	22	25	2	1	50	−0.18	10
土佐日記	0	3	5	0	0	8	−0.25	11
平中物語	1	16	30	1	0	48	−0.29	12
今昔物語集	78	621	1389	69	0	2157	−0.34	13
更級日記	1	5	19	0	0	25	−0.44	14
伊勢物語	0	3	8	0	0	11	−0.46	15
紫式部日記	0	2	7	0	0	9	−0.56	16

に限られていることによる。

3　『落窪物語』は大衆小説つまり当時の侍女階層の文学とされ、侍女のあこきやその夫の帯刀などの活躍する世界を描いている。『源氏物語』に比べて敬度指数が低いのは両物語の登場人物の階層の相違を示していよう。

4　『源氏物語』の敬度指数は右『夜の寝覚』『落窪物語』のほゞ半ばに位置する。

5　歌物語については『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』ともに敬度指数が低い。

6　日記文学は敬度指数のばらつきが大きい。『和泉式部日記』の敬度指数が高いのは、用例が帥宮と作者とに関わるものがほとんどで、相互に高い待遇をしているからである。紫式部日記の敬度指数は最低である。全九例中七例までが敬度C（うち道長から作者や中宮権亮に対するもの四例等）で、聞き手（受命者）の地位の相対的な低さによる。

7　説話文学では『今昔物語集』は全体に敬度指数が低い。『古本説話集』の敬度指数は比較的和文の物語に近い。前述のように、この表は各作品を敬度指数の高低順に並べたものである。こうした数値を算出することによって、作品間の敬意の度合の小差をも識別し得たのである。逆に言えば、敬度値、敬度指数という指標なしにはこのような配列は不可能であって、単に、ある作品には二重敬語が多い、敬体が多い、あるいは常体の率が高いといった程度の、印象的な把握で終らざるを得ない。それ以上の精緻な考察はなし得なかったのである。

また、ある作品の敬度指数の数値を手掛かりに、更にその作品の性格の分析へと発展することもあり得るのである。例えば、〈『落窪物語』の命令・勧誘表現〉から、〈命令・勧誘表現からみた『落窪物語』〉へ、と展開するというふうに。

第3表は落窪物語の巻別敬度指数を表示したものである。

この表を見ると巻をおって敬度指数が高くなっている。これは一見登場人物

第3表　『落窪物語』の巻別敬度指数

巻	A	B	C	D	N	計	敬度指数
一	8	48	39	2	0	97	+0.28
二	8	46	38	0	0	92	+0.37
三	5	28	15	0	0	48	+0.58
四	7	54	14	0	0	75	+0.81
計	28	176	106	2	0	312	+0.47

の官位の昇進、身分の向上によると考えられそうであるが、事実はそうではない。

前半の巻一、巻二の敬度指数が比較的低い理由は、主として、敬度の低いあこき、帯刀及び男君の供人等々が受命者の場合が多いことによる。後半の巻三、巻四の敬度指数が比較的高い理由は、この両巻の敬度Bの用例の比率が高まったことによる。要するに、前・後半のこの敬度指数の差は、登場人物の官位の昇進、身分の向上によるというよりも、主として登場人物の出入り、交替によるものである。即ち、巻三以降敬度の低い帯刀、あこき、侍女、供人等の受命者としての例が激減し、代わって、敬度の高い、中納言、四の君、少将、帝等に対する用例が多くなったことによる。

ここではこれ以上の詳細な吟味は省略するが、敬度を措定し、それを敬度値として数量化し、それに基づく敬度指数を算出することによって、こうした細かな分析が可能になったのである。

なお、ここには表示しなかったが、例えば『今昔物語集』についても敬度指数の高低順に全巻を配列することが出来る。敬度指数の最高は巻二二のプラス〇、二九、これは藤原氏一門の奇譚逸話の巻であり、最低は巻二五のマイナス〇、八〇、これは源平二氏を中心とする合戦武勇譚の巻である。両巻の話柄の相違を感じさせよう。

第4表は『落窪物語』『源氏物語』『夜の寝覚』の性別の敬度指数を示したものである。（ここでは前掲第2表から神仏、物怪、性別不明等の若干例を除いたものを対象としている）

第4表　『源氏物語』『落窪物語』『夜の寝覚』の性別敬度指数

	話手→聞手	源氏物語	順	落窪物語	順	夜の寝覚	順
イ	男→男	＋0．05	4	＋0．13	4	＋0．17	4
ロ	男→女	＋0．83	3	＋0．48	3	＋1．34	2
ハ	女→男	＋1．40	2	＋0．96	1	＋2．00	1
ニ	女→女	＋1．45	1	＋0．55	2	＋1．31	3

1　三作品を通じ女の言葉の敬度指数が高いことが知られる。[*6] 特に「ハ」の〈女→男〉のそれが著しく、『夜の寝覚』『落窪物語』では他の三者を大きく引き離している。特に『夜の寝覚』の場合、作品全体の敬度指数もプラス一、二一と他作品から突出していたが、ここでも他には見られない甚だ高い敬度指数を示しているのは、聞き手が男君、まさこ君、宰相中将、帝、太政大臣等々（用例の多い順）の高貴な人物に集中していることによる。

2　右とは対蹠的に、「イ」の〈男→男〉の場合は、三作品を通じて甚だしく敬度指数が低い。『源氏物語』などはほとんどゼロに近い。ゼロということは敬体以上と常体以下とが拮抗していることを意味する。これは主従関係での用例の比率の高さによるものである。

3　『落窪物語』『源氏物語』について言えば、「ニ」の〈女→女〉の方が「ロ」の〈男→女〉の敬度指数を上回っていることを見る。

4　「ハ」の〈女→男〉と「ロ」の〈男→女〉の場合を比較すると、既に見たように「ハ」の方が高く、しかもその較差は画然としている。

これまでも性別による敬意の度合の差について一部言及したものはあるが、[*7] このように多くの用例に基づく数値を提示することによって、初めて明確な判定が可能となったのである。

第5表は『源氏物語』の話し手、聞き手それぞれの、地の文における待遇（敬度ⓐⓑⓒ）と敬度指数との関係について整理したものである。以下、若干の項目について略述する。

1「イ」の項はⓐ→ⓐ、即ち地の文における敬度が最高同士（春宮→父朱雀院）の間の表現であり、敬度指数も最高値のプラス三、〇〇になっている。ただし一例だけであるから、ここではこれ以上は触れない。

第5表　地の敬度の関係と敬度指数

項	地の敬度の関係	敬度指数	用例数
イ	ⓐ→ⓐ　→	＋3．00	1
ロ	ⓑ→ⓐ　↗	＋3．00	3
ハ	ⓒ→ⓑ　↗	＋2．23	81
ニ	ⓑ→ⓑ　→	＋1．30	254
ホ	ⓒ→ⓒ　→	＋0．67	85
ヘ	ⓐ→ⓑ　↘	＋0．38	16
ト	ⓑ→ⓒ　↘	−0．44	195
チ	ⓐ→ⓒ　↘	−1．00	3

注1）「ⓒ→ⓐ」は用例がないので、表に入れていない。

2）矢印の方向は話し手、聞き手の地の文における敬度の上下関係を示す。（「地の文における敬度」を「地の敬度」と略記した）

2　地の文における敬度がそれぞれ同段階の話し手・聞き手の間の表現でも、「ニ」と「ホ」とでは敬度指数に大きな差がある。即ち地の文における敬度の高い者同士の間では高い待遇表現ー敬語的表現が多いことを知る。換言すれば、第二種の敬度の高いもの同士の間の表現は、第一種の敬度ひいて敬度指数が高いということである。[*8]

3　同様に、下から上への間（「ロ」及び「ハ」）、上から下への間（「ヘ」及び「ト」）においても、地の文における敬度が相対的に高い者の間の表現である「ロ」と「ヘ」とが、それぞれ他に比して高い敬度指数を示していることを認め得る。しかもその差は歴然としている。

4　更に「チ」の如く話し手・聞き手の間の地の文における敬度の差異が大きいーこれはひいて身分的な懸隔の大きさでもあろうー場合は、用例が少ないが、すべて敬度Cで敬度指数は表中最低になっている。

5　聞き手が同じⓑ段階であっても、「ハ」と「ニ」と「ヘ」とでは当然ながら敬度指数に大差がある。〈下から上へ〉と〈対等間〉と〈上から下へ〉との差である。また聞き手が同じⓒ段階の場合でも、相手（命令者）如何によって同様に敬度指数に大きな差が見られる。

この第5表は初めに規定した第一種の敬度、敬度値、敬度指数と第二種の敬度とを総合した形になっている。

なお、ここで話し手、聞き手の段階の基準を地の文における待遇によったことについて述べる。こういう段階設定で、普通にとられる方法は登場人物の身分関係を基準にするやり方であろう。これはそれなりに有効な方法であること勿論である。ここでこの方法をとらなかった理由は次のとおりである。

一　地の文における待遇を基準にするということは、登場人物に対する作者による待遇、作者その人の視点、時にはその厳しい規範意識を基準とすることである。

二　先にも少し触れたように、地の文における待遇は常に一定なのではなく、その身分上の変化や、その場面の登場人物相互の身分関係等で動いている。更に登場人物の意識が地の文における待遇を左右しているとみられる場合さえある。命令・勧誘表現とは言うまでもなく登場人物相互の間に行われるものであるが、地の文における待遇を基準にするということは、右の変動にそのまま即応することであり、個々の場面をより具体的に反映させることが出来る。

三　右一、二は、処理に当たって研究者の主観や恣意をゆるさないことを意味する。

四　地の文における敬度ⓐⓑⓒに所属する人物の段階は、結果的には身分的な序列による段階づけとほぼ対応し

ている。

以上がその理由である。一、二、三を積極的な理由とすれば、四は消極的な理由であるが、右によってこの基準も十分成り立つものであると考える。また、これを採用することによって、いくつかの作品を同一の基準によって比較することも可能となるのである。

第6表は『落窪物語』『源氏物語』の主要人物（用例が多い人物）の敬度指数の表である。各人につき話し手の場合、聞き手の場合の二つの敬度指数（①②）を対比する形で示し、聞き手としての敬度指数の高い順に並べてある。ここからどのようなことが知られるであろうか。

1　まず『落窪物語』の例から見よう。敬度指数①②を比較してその数値の大小を不等号で表わしてあるが、中納言から中納言の北の方までとあこき、帯刀との不等号の向きは反対になっている。これは誠に綺麗に作中人物の身分関係を示していると言ってよい。なぜなら、

（Ⅰ）聞き手として高く待遇される人物は、話し手としては相手に対して逆に相対的に低い言語的待遇をもって対し得るからである。主従関係などはその典型である。言うまでもなくここでは不等号の向きは（＜）となる。

（Ⅱ）あこき、帯刀の場合はそれとは正に対蹠的な位置にある。即ち主筋の相手に対して二人とも高い言語的待遇をもってし、逆に自らは甚だ低く遇せられている。帯刀の例では敬度指数①と②はプラス一、〇〇とマイナス一、〇〇であってぴったりと対称をなし、端的にその立場が表われているのである。

2　『源氏物語』についてみる。まず匂宮から八宮までについて言えば、凡そ右（Ⅰ）の傾向を認めることが出来

第６表　その１　『落窪物語』の主要人物の敬度指数

人物	地の文における敬度	話手＝命令者として		敬度指数①②の比較	聞手＝受命者として	
		用例数	敬度指数①		用例数	敬度指数②
中納言	ⓑⓒ	２２	＋０．２７	＜	９	＋２．１１
男君	ⓑⓒ	１０８	＋０．１７	＜	２９	＋１．０７
女君	ⓑⓒ	２９	＋０．５２	＜	５７	＋１．０４
北の方	ⓑⓒ	３７	＋０．４１	＜	２９	＋０．７９
あこき	ⓒ	２８	＋１．２９	＞	３３	－０．４６
帯刀	ⓒ	１４	＋１．００	＞	２６	－１．００

第６表　その２　『源氏物語』の主要人物の敬度指数

人物	地の文における敬度	話手＝命令者として		敬度指数①②の比較	聞手＝受命者として	
		用例数	敬度指数①		用例数	敬度指数②
匂宮	ⓑ	３１	－０．３５	＜	９	＋２．１１
源氏	ⓑ	１８４	＋０．２８	＜	３１	＋１．９０
浮舟	ⓑⓒ	８	＋１．２５	＜	４１	＋１．７８
横川僧都	ⓑⓒ	１１	＋０．２７	＜	４	＋１．５０
女三宮	ⓑ	２	＋２．００	＞	１４	＋１．４３
薫	ⓑ	５９	＋０．８３	＜	１６	＋１．５０
玉鬘	ⓑ	５	＋１．００	＜	１８	＋１．２８
紫上	ⓑ	９	＋１．２２	＞	３１	＋１．１３
夕霧	ⓑ	２５	＋１．１６	＞	３５	＋１．０３
八宮	ⓑ	８	＋０．７５	＜	１	＋１．００
柏木	ⓑⓒ	１８	＋１．７７	＞	７	＋０．４３
右近（1）	ⓑⓒ	２	＋１．００	＞	１４	－０．２９
右近（2）	ⓒ	１０	＋１．００	＞	８	－０．７５
惟光	ⓒ	８	＋２．２５	＞	１１	－０．８２

注　「右近（1）」は夕顔の侍女、「右近（2）」は浮舟の乳母子である。

よう。ただし、女三宮、紫上、夕霧では不等号の向きは（＞）となっている。この三者は身分が高く、それに相応して聞き手としての敬度指数が高いにも関わらず、なぜこのような不等号の向きが見られるのか。次にその理由を簡単に述べる。

女三宮の話し手としての二例は父朱雀院に対する「尼になさせ給ひてよ」（「柏木」敬度A）と子の薫に対する「みえ給へ」（「宿木」敬度B）とである。用例の少なさと相手（受命者）の身分の高さとが敬度指数を甚だ高くしているのである。紫上の例では敬度指数②が予想外に低い。直上の玉鬘より低くなっているが、これは源氏が話し手であることが多いことによる（三〇例中二六例。Aが一例、Bが二三例、Cが二例）。

夕霧の場合も相手（命令者）の地位の高さ及び三五例中一三例までが父源氏からのものであることなどによって、敬度指数②が①を下回っているのである。

3　右の他、柏木の例について触れておく。柏木が話し手の例は一例を除き「若菜下」と「柏木」の巻のもので簡単にいえば、すべて女三宮を巡ってのものである。敬度指数①が異常に高いのは対等以上の相手（受命者）に対し敬度A、Bで待遇しているだけでなく、女三宮の女房、小侍従に対しても、例えば「……たばかり給へ。……よし見給へ、……」（「若菜下」）の如く、五例すべて敬度Bの待遇であることによる。柏木の立場や、心理状態を窺わせるのであるが、ここでは詳説する余裕がない。柏木の聞き手としての敬度指数②が比較的低いのは相手（命令者）が父、母、源氏、夕霧の四者に限られ、敬度B、Cの待遇になっていることによる。

残る二人の右近、惟光等は『落窪物語』のあこき、帯刀と同様であるから説明の要はなかろうと思う。ただ惟光の場合敬度指数①と②との差がプラス・マイナス三以上になっていることを指摘しておく。（なお、これと好

対照をなすのが表中最上位に位置する匂宮の例である）。

以上、第6表について簡単な説明を加えた。各人について敬度指数なにがしと示すだけでも意味があろうが、ここではそこに止まらず、話し手の場合、聞き手の場合の二つの敬度指数（①②）を対比する形で示すことによって、右のような事実を見出した。敬度指数を手掛かりとすることによって新たな問題を発掘し、それを吟味することが出来た訳である。新たな指標によって新たな問題が見えてきたというべきであろう。

おわりに

以上、「敬度」「敬度値」「敬度指数」という概念を改めて提唱し、それに基づく分析、考察によって、いくつかの新たな事実を見出すことが出来た。新たな指標を設定することによって、種々の場合について、敬意の高低、敬意の度合を客観的に算出、識別し得たのである。また、そこから更に次の問題へと発展する緒も見出された。ただ第四項は諸問題の展望・鳥瞰図であって、一々の例について詳説する暇はなかったが、この概観によってもこの方法の有効性、必要性が確認出来たであろう。更に付言すれば、ことは命令・勧誘表現だけに止まらず、広く待遇表現一般の問題に適用し得るはずである。この指標はそれだけの射程、発展性をもつであろうと思う。

表現の問題を扱う以上、個々の実例についてその表現形式に即し、その場面を含めて、具体的に吟味することが必要不可欠なことは言うまでもない。と同時に作品や種々の類型について、その全体を客観的に把握するための数量化、抽象化の方法もまた必要である。そしてこのアプローチは従来欠けていたものであろう。

本稿でとった方法では、例えば、

例五　……給へ　……給ひね　……給ひてよ　……給へかし

例六　①　とく帰り給へ　②　早、出立ち給はむ　③　見奉り給はむや　④　申しやはし給はぬ

等で、例五の助動詞、助詞の有無の差は捨象されてしまう。また例六は、①命令形による直接的な命令表現、②推量形式による婉曲な命令・勧誘表現、③推量－疑問（問い）の形式による、一層婉曲間接的な命令・勧誘表現、④反語……否定の形式による、最も婉曲間接的な命令・勧誘表現であり、筆者の謂う「命令・勧誘表現の四段型体系」を構成する各形式であるが、これら各形式の表現価値の差も捨象されてしまう。こうした個々の表現形式に即し、具体的にその表現価値を把捉することが極めて重要なことは先に触れたとおりである。しかし、これらはまた別に考うべきことであって、この観点からは既に「中古仮名文における命令・勧誘表現体系」[*9]において考察した。また「源氏物語の命令・勧誘表現」[*10]では敬度と右「四段型体系」とを関連付けての分析を実践している。更に、近くは「今昔物語集の命令・勧誘表現について（その二）－待遇表現を中心として－」及び「落窪物語の命令・勧誘表現－待遇表現を中心として－」等[*11]においても、こうした観点からの分析を試みている。本稿はもっぱら命令・勧誘表現における敬意の度合の客観的な把握を問題にしているのである。

事実を明らかにするために追究の方法は多様であってよい。

注

＊1　本稿では「命令・勧誘表現」という語を広義に用いており、いわゆる命令・勧誘の他に依頼・懇請・強制・勧奨・慫慂等々の用法を含めている（ただし否定の命令表現である禁止は除く）。従って、ここには例えば〈話し手＝従者→聞き手＝主人〉の場合の「……給へ」「……せ給へ」等、義門のいわゆる「希求」に相当するものも含む。なお、義門の「希求」とは次のようなものである。

「世にいはゆる下知の詞也。こは下知と云ひてはいかにぞや覚ゆることもあるからに、友鏡には使令といへれど、それもやはりあたらぬわけあるゆゑ、略図には又あらためて希求と目けたる也。主君にむかひて『云々し玉へ』と申す玉へのへ」など、之を下知　使令といひては当らぬにあらずや」（「活語指南」『義門研究資料集成　上巻』四二六頁）

＊2　「敬度」という語は以前から一部の研究者によって使用されてきた。最近では一般化したようである。筆者は「源氏物語の命令・勧誘表現」（「国語国文」昭和五一年一一月号）において「敬度」「敬度指数」という二語を既に使用したが、今新たに定義して使用する。「敬度値」という語は新提唱であるが、実質的には右拙稿で取り入れていたものである。

＊3　敬語動詞や敬意を表わす助動詞及び補助動詞の敬意の度合のランク付けについては諸家に見解がある。ここでは敬度A・Bに相当する語について、玉上琢彌の『源氏物語』の敬語についての多くの所説、特にその最終的な見解と目される「源氏物語の敬語法」（時代別・作品別解釈文法「解釈と鑑賞」昭和五八年一月臨時増刊号）によるところが多いが、必ずしもその総てに従うものではない。また、一部『源氏物語』以外の例も含め、私見により整理した。

＊4　「召せ」については拙稿「『今昔物語集』における命令形「召セ」の待遇価値－付動詞命令形「給へ」「給べ」－」（「史料と研究」第二五号、平成八年二月）において、中古・中世の物語・日記・説話等三十余の作品における用法を整理し、表示した。なお、穐田定樹『中古中世の敬語の研究』（八〇～九〇頁）を参照されたい。

＊5　常体表現の命令形が敬語的にマイナスである点について、辻村敏樹「敬語と非敬語―敬語研究の問題点－」（「国語と国文学」昭和五一年一〇月号）で触れており、拙稿「源氏物語の命令・勧誘表現」（「国語国文」昭和五一年一一月号）においても、その敬度をマイナスとして扱った。

またこれについてははやくロドリゲスの『日本大文典』にも関連する叙述がある。

＊6　『敬語と敬語意識』（国立国語研究所報告11）によれば、「男と女とを比べると、有意差をもって男より女の方がていねいな敬語形式を使っている」とされる（二七〇頁）。これはおそらく古今通底の事実ではあるまいか。

＊7　森野宗明「古典敬語の構造と識別法」（「国文学　解釈と教材の研究」昭和四七年三月号）、三宅　清「尊敬語の命令形について－源氏物語を資料として－」（「岡山大学教育学部研究集録第八〇号、一九八九・三）等。

＊8　『敬語と敬語意識』によれば、「階層別では、有意差は見られないけれども、傾向的な差はある。すなわち、一貫して、階層の低いものよりも高いものの方が敬語行動がていねいである」とされる（二七〇頁）。地の敬度の高低は、ほゞ社会的

階層の高低に対応しており、古今その軌を一にしていることになろう。

＊9　「国語国文」昭和五〇年三月号。

＊10　「国語国文」昭和五一年一一月号。

＊11　北海道説話文学研究会、平成二年度大会及び平成四年度大会における口頭発表。

調査した作品の依拠本文を次に記す。

竹取物語・伊勢物語・大和物語・源氏物語・平中物語・篁物語・土左日記・今昔物語集は『日本古典文学大系』、夜の寝覚・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記は『日本古典文学全集』、堤中納言物語は『新潮日本古典集成』、落窪物語は『新日本古典文学大系』、古本説話集は『古本説話集総索引』（風間書房）による。

【付記】　本稿は平成八年八月二四日の「北海道説話文学研究会　夏季大会」における発表を基にしている。